

立ち読み版



しなのの優良アーティストワークス



2d Illust Collection

Shinano Yura Artworks

Comic Prism Works

3-16

Oshikake Meido Tai Works

17-78

Pocket Novels Works

79-182

Magazine & Comic Works

183-190

Novels Works

191-248

これまでキルタイムで描かれてきた、
しなの優良(しなのゆら)先生の
作品をまとめた電子イラスト集！
小説挿絵で描かれたイラストを中心に、
これまでの雑誌の表紙や、ピンナップ画像なども含めた
大ボリュームの構成になっています！
また、本編は印刷も可能！（PDFファイルで提供の場合のみ）
お好きなシーンを手元において楽しめます！
本編では、このテキストは掲載されていません。











「はあい、どぴゅどぴゅしまししょうね〜っ♪」
茜はトドメとばかりに、ペニスをしごきな
がら、尿道口をクリクリッとマッサージした。
その刹那、少年の脳髓に電撃が奔る。男根の
中で、何かのタガが弾け飛んだ。

「うあっ!？」

先端にまで精液を溜め込み、爆発寸前だっ
た勃起は、その苛烈なまでに甘美な一撃を受
けて、あっけなく限界を越えてしまう。

「あっ!?! う、ううっ! うくううう〜
〜っ!!」

びゅるっ! びゅびゅーっ! びゅっ!

今までに感じたことのない、灼けるような
陶酔と共に、煮えたぎったザーメンが放たれ
る。白濁した飛沫は、男根を包み込む茜の掌

にドロドロと撒き散らされていく。

——出てる。出ちゃってる……。

裸身をのけぞらせて、雪也は世界が真っ白
になるのを感じていた。全身が硬直し、全
ての意識が股間の逸物に集中する。熱い塊を吐
き出すペニスは、メイド美少女の柔らかな手
の中で狂おしく暴れていた。

どぴゅ……びゅるんっ……びゅっ……びゅ
る……。



「えっ、えっと……」

積極的なおねだりに、戸惑う雪也。あやふやな知識しかない未熟な少年にとって、情欲に取り憑かれた女の子の相手は荷が重すぎる。

だが雪也としても、こんな淫靡な態度を見せつけられて、興奮しないはずがない。その証拠に、欲望の名残りを滴らせた男根は、萎えるどころか射精前以上にギンギンにみなぎっていた。

「ほらあ、御主人様あ……♪」

とうとう我慢できなくなったのか、茜は床に寝転び、脚を大きく開いてみせた。おしゃれなデザインのマイド服が床の水気を吸って濡れ、おまけにしわくちゃになってしまおうが、彼女は全く気にしていない。その結果、メイ

ド服のミニスカートは、簡単にその内側を異性の視線に晒してしまう。

ぬちゅうっ……。淫乱メイドの下着は、やはり淫乱そのものだった。ピンクの薄い生地で作られたパンティは、極限ギリギリまで布地をカッティングしてある。ほとんど紐に近かった。淡い亜麻色の陰毛がパンティから覗き見えるのが、ひどくいやらしい。



啓介の男性器は柔らかく甘い感触のバストで溶かされ、巧みに急所を責めてくる舌端に弄ばれる。ぞくぞくと背筋を快感が昇りつめてきて、タキシード青年は射精の衝動に身を震わせた。

だが、そんな弟の抵抗を姉は許さなかった。ぐちゅっ、ずちゅぬっ、ちゅく、ちゅぷぷっ……！　パイズリの動きが一層激しさを増して、ローションが細かく泡立つ。それと同時に舌端が龟头の鈴口に差し込まれ、唇がカリをしごき上げた。

「んっ……我慢は毒よ、啓介。お姉ちゃんの口で射精していいから、ね？」

「そ、そんなことでき……ひああっ！」
拒絶の言葉を口にしかけた青年だったが、

尿道口を舌でほじられて悲鳴をあげる。甘い火花が視界で明滅し、腰がびくびくと跳ねてしまう。

すでに熱くたぎった欲望は、尿道いっぱい詰り込め込まれていた。破裂しそうなほどに反り返った怒張が、姉の懐に抱かれて射精直前のひくつきを繰り返している。



淫蕩な姉の喘ぎに、啓介は激しく腰を振って応えた。たぶたと波打つ巨乳をつかみながら、十六夜の上気した耳元に囁く。

「お、俺ももう……出ちゃうよ……」

「いいよ……！ はっ、あううっ！ お、お姉ちゃんのお尻に……ひゃあうっ！ 出してええええっ！」

その言葉が終わらないうちに、メイドのアヌスが引き締まる。吸いつくような動きが、ペニスにたぎっていた精液を射精へと導いた。

「や、やば、もう出……うううっ！」

啓介は呻きながら、姉の巨乳を揉みしだく。乳首を強くつねると、腸液でぬかるむ肛門が幹をしごいた。そのまま一気に、青年は欲望を解き放った。

びゆるうううっ!! どくっ、どくんっ!!

びゅううっ、びゆるっ、どびゅどびゅっ!!

「あ、出て……ふあぁっ！ ひっ！ あっ、熱っ……くふうううううう——っ!!」

のけぞりながら絶頂に達する十六夜。その直腸を、ドロドロに煮詰まった精液が満たしていく。アヌスに堰き止められていた白濁液は、凄まじい勢いで腸壁に叩きつけられる。







恥ずかしそうに震える勝ち気な乙女の声が
牡の攻撃本能を痛いほど刺激した。

自分の指が思いきり乳肉を揉みしだいて乳
肌に食い込むたび、あつちを向いたりこつち
を向いたりと卑猥なダンスを踊る二つの乳勃
起の眺めがたまらない。

「ちゅぶっ!!」

「きゃん!? あっあっあっ!」

ニオは数週間ぶりにオアシスに辿り着いた
砂漠の放浪者が清冽な水にむしゃぶりつくよ
うな性急さで片側の乳首を口に含み、れろれ
ろと舌で舐め転がした。

「あはあんっ! な、舐めちゃダメですわ：
…何をなさるの…：あああっ!!」

負けるものかと主張するかのように、硬く

締まった肉実をザラつく舌粘膜に食い込ませ
て震える乳母が愛らしい。少年は知っていた。
この乳勃起をいじくられることが、女の子に
とってどんなに気持ちのいいことか。まして、
舐められなどしたら――。

「ちゅぱちゅぱ…：れろん、れろれる…：は
あはあ…：れろん、れろん…：」

「あああっ! い、いやあっ! いやっ…：
あっあっあっ…：あはあっ!!」



ぺろっ、ぴちゃ、ねろねろっ、ちゅっ、ちゅぱっ……。二人の少女が奏でる、淫靡な口唇奉仕の音色。尿道口を吸い、龟头粘膜を舐めくすぐり、尿道を圧迫し、エラを舐め回す。漏れ出したカウパー液が二人の頬を汚し、唇から溢れた唾液が幹を伝う。

「ぐっ、うううっ！」

技巧を凝らした二人のくノ一の奉仕に、直樹は何度も絶頂に達しそうになっていた。

だが、逸物の根元を縄で縛られているせいで、どうしても達することができない。射精直前の状態のまま、青年は甘美な拷問に苦しむ。出口を失ったザーメンが、身体の奥で暴れているようだ。

(き、気持ちいいっ……。けど、けど早く射精

させてくれっ！)

そんな直樹の祈りを聞きつけたかのように、五月がサディステイックな微笑みを浮かべた。口の端に垂れる唾液を拭いながら、小馬鹿にしたような声で嘲る。

「なあに、もうはち切れそう？ あははっ、こんな扱いを受けても射精したいのね？」

「たっ、頼む……。縄を……。ほどいてくれっ……。！」

すると黒髪のくノ一は、目を細めてペロリと唇を舐めた。



カナがへの字に唇を噛みしめながら、心の口の中で派手に爆発する。同期してナオミの黒光りするペニスも膨れ上がり、凄まじい量のザーメンを心の妊婦腹にぶっかけた。

どびゅ、どびゅるるるるるるるるるるうう——っ!!

濃厚な射精液が喉奥と腹に、熱く痺れるように叩きつけられる。

「あぐうう、あああああ、あああああああああああああ——っっっ!!!!」

激しい抽送にカナのペニスが口から抜け、白濁がぶびゅるぶびゅと鼻の下から顎先までを粘りで焼いた。スペルマのえぐみに鼻孔粘膜が爛れ、心も最後まで息みきった。ナオミの大量射精が臍の窪みにたつぷりと流れ込み、

雄の絶頂液に白く汚れたコルセットのベルトが力みで膨れ上がる妊婦腹のテンションにぎしぎしと千切れそうに軋んだ。

心の苛烈な締めつけに、尻孔でもはるかが絶頂を迎える。

「おおおおおおお、イツちゃうううう、心のお尻でえええイクうううう——っ!!」

びゅくぐぐうう、びゅく、びゅくるるるるるるううううっ!

母親の熱い迸りで直腸が膨張し、性熱が腹腔を満たす。赤と白のオーバーニーソに包まれた美脚が痙攣する。ブルマーの裂け目が最大に開き、卵の全てを排出させる。







天空戦姫カスターゼ 表紙イラスト
[2004年7月]

なぜか声を出すことがはしたなく思えて、カスターローゼは喘ぎ声を我慢しようとしているのだが、それは不可能だった。そんなことをしたら身体中が熱くておかしくなってしまう。あたりをばからずに喘ぎ声を上げずにはいられない。

クリトリスへの集中刺激を貪り出したら、女のフィニッシュは間近である。

脂肪の塊である乳房が、タップンタップンと揺れ、露出の激しい衣装からいまにも飛び出すような乳首が、痛々しいほどにぷっくりと痼り立っていることが見て取れる。

そんな艶姿を見守る周囲の者たちは、昇り詰める瞬間を見逃すまいと、固唾ずを飲んでいる。

肌に突き刺さるほどに痛い視線を、四方八方から受けながらも、天使はどうすることもできない。

「ひあああああうううっ……！」

頓狂な声を漏らして、衆人環視のなか天使は恥知らずなほど口を大きく開き、喉の奥底まで晒し、涎を吹いた。吊り上げられている脚の、特に右脚がビクンッビクンッと痙攣した。

はじめての絶頂を体感したのである。



「お前がいつも弄っているクリトリスが膨らんできたぞ。いやらしい雌犬め。近頃のカキは、陰毛も生えないうちから犬のように発情するようだな」

「違う、違うってばあつ！ やめてよお！

ミナのこと勝手に変な風に言わないでえ！」

愛液の分泌は敏感な粘膜を刺激から守ろうとする生理的な反応に過ぎない。しかし、まともな性教育など受けたこともないミナには、そんなことを知る由もなく、どうしようもなく自分の汚れた身体に対する嫌悪感が溢れてくる。しかも、陰壺に湧き起こる熱はどんどん高まっていき、擦り合わせる太腿には粘りついた感触が広がっていく。そして、淫靡な空気に満ちた劇場には、大音量のスピーカー

から恥ずかしい粘着音が響いている。

洪水のように次から次へと溢れてくる粘蜜が、太腿を滴るだけでは足りずに、秘裂から床へと直接垂れ落ちて長い糸を引く。水のように流れる麻衣香の愛液とは違って、少女のそれは恥ずかしいほどに粘ついて透明な柱を作り上げている。

「観客の諸君！ 見たまえっ！ いやらしいクリトリスが下着の上からでもはつきり分かるほどに勃起しているぞ。さあ、この豆の色艶がどんなものか拝んでみたいとは思わんかね！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>